

いにしえの道をたどる

渥美半島の古道

―海^おの道・陸^かの道―

吉胡貝塚の近くにある大きな岩。

その上に、一つの常夜燈が鎮座しています。

蔵王山を背にして、

田畑や汐川を見渡すこの場所に、

なぜ、建てられたのでしょうか。

この常夜燈の通称は、「矢崎灯台」。

実は、ここを行き交う船の、

航路の目印として利用されていたものなのです。

およそ400年ほど前までは、

この常夜燈の近くに、田原湾が広がっていました。

渥美半島は、その地形やまちなみが、

時の流れとともに、大きく変化してきました。

私たちの生活に欠かせない「道」もその一つ。

「古道」の足跡をたどれば、

先人たちの面影と、歴史の息吹に、

触れられるような気がします。

そして、私たちが進むための、

「道しるべ」を、

見つけることができるでしょう。

※現在の常夜燈は、昭和10年に建て替えられたものです。

古道

「道」

は、古来から情報や物資を伝達する動脈であり、社会経済の発展に大きな役割を果たしてきました。現在では、私たちの暮らしに、なくてはならない存在となっています。渥美半島の「道」にも、発達の歴史や意義があります。

歴史に残る二つの街道

三方を海で囲まれた渥美半島は、古くから海上交通が盛んです。また、伊勢地方とのつながりが深かったため、最短距離である「海^みの道」や「湊^{みなと}」が発達してきたと考えられています。その影響で、「陸^{おか}の道」も独特の発達をしながら、時代や地形の変化とともに、栄枯盛衰の歴史を刻みました。

渥美半島の古い「陸の道」としては、太平洋沿いを通る「伊勢街道」と、三河湾沿いを通る「田原街道」と呼ばれる二つの街道がありました。

中世に栄えた伊勢街道は、東海道の白須賀宿を分岐点に、伊良湖まで続く陸路を中心とし、半島先端からの海路を含めての通称とされています。

近世に栄えた田原街道は、同じく東海道の二川宿や吉田宿を分岐点に、田原城を経由し、半島の先端まで続く陸路の通称とされています。